

ハーバート・リードと英国美術教育改革  
—批評家と教育実践者との対話をめぐって—

Herbert Read and the Reform in Art Education in the United Kingdom  
—A Consideration on the Dialogues between Critics and an Educator—

直江 俊雄

# ハーバート・リードと英国美術教育改革 —批評家と教育実践者との対話をめぐって—

Herbert Read and the Reform in Art Education in the United Kingdom  
—A Consideration on the Dialogues between Critics and an Educator—

直江俊雄

## 1. 本論文の目的、背景ならびに方法

本論文の目的は、『芸術による教育』<sup>1)</sup>を著し、美術教育思想史に大きな足跡を残したハーバート・リード (Herbert Read, 1893-1968) による当時の美術教育運動への接触の初期段階について、理論と実践の間の対話をめぐる歴史的資料を通して探り、その芸術教育論に関する解釈の基礎となる一つの実像を明らかにしていくことにある。とくに、実践者の立場から英国の美術教育改革を主導した、マリオン・リチャードソン (Marion Richardson, 1892-1946) との関わりをおもな軸とし、リードと同じく美術批評の立場から理論的にこの運動を支援したロジャー・フライ (Roger Fry, 1866-1934) との比較を織り込みながら論じていく。

リードの芸術教育論については、すでに膨大な言及や研究がなされており、例えば近年の我が国における研究の代表的なものとして、本学会誌に発表されたものに限ってみても、少なくとも8件の成果を参照することができる。そのもっとも初期にあたる1981年の山本朝彦氏の論文では、リードの芸術教育論に複数の異なる理論的枠組みが共存するという批判に対して、むしろ諸理論間の積極的な「架橋」によって現代の閉塞状況を打破していく積極的な意義を見いだそうとしており、今日に至るまでの本学会におけるリード研究の基本的な方向と課題を示したものと理解できる<sup>2)</sup>。1984年、85年に続けて発表された長谷川哲哉氏による研究では、国内外におけるそれまでのリード芸術教育論研究を徹底して検討し、主に欧米の研究者によって提示されているリードの理論的脆弱性への批判に答え、「生の哲学」を根本にしてリードを再評価した<sup>3)</sup>。我が国において大正期から根強く支持されている「生命の表現」のような一種の美術指導原理が、リードの芸術教育論受容の基礎となっているという指摘は、今日においてこそ真価を認められるべきであろう。長谷川氏はまた、1989年に発表した研究<sup>4)</sup>において、ドイツの「芸術による教育」思想に対する批判から、リードの芸術教育論にも共通する「非合理的な政治的イデオロギーとの結合」の可能性を指摘するが、この見解は、今日の国内外の社会的変化の中で一層その重要性を増していると思われる。また、「高遠な理念」とともに「合理的な教授学的思考」が必要である、とする長谷

川氏の主張は、本論文における基本的な立場と一致するものである。

竹井史氏は1987年の論文で、それまでの研究には「彼の芸術論解明に重要な観点を提出すると考えられる教育思想形成に関する歴史的側面からのアプローチが決定的に不足していた」<sup>6)</sup>との認識から、英国新教育運動の歴史的展開過程とリードの思想との接点を探り、また1989年には、三つの年代にわたるリードの著作（『芸術と社会』1937年、『芸術による教育』1943年、『子どもの美術の重要性』1957年）を中心に論じている<sup>6)</sup>。本論文も、歴史的アプローチからリード解釈の共通基盤形成に寄与するという問題意識を、竹井氏と共有するものである。竹井氏が新教育運動の一般的経緯を軸に論じたのに対し、本論文では、リチャードソンという教育実践者個人との具体的な交流を軸にしていること、また竹井氏が1937年の著作を起点に論じたのに対し、本論文では、これにやや先立つ1934年から35年頃をおもな対象にしている点に特徴がある。

1987年には、リードの芸術教育論における「直観」を教育的方法として位置づけることを主張した南部正人氏の研究が発表されている<sup>7)</sup>。1995年には、おもにモホイ=ナジとの具体的交流からリードとバウハウスとの関係を論じた研究が本村健太氏によって発表されているが<sup>8)</sup>、モホイ=ナジからリードへの書簡（1934年）と、リードによるモホイ=ナジの著作に関する論評（1935年）は、本論文で取り上げるリチャードソンとの書簡による交流と書評執筆の年代と重なる時期であり、リードによる美術・デザイン教育者との交流の事実解明に、あわせて寄与することになるものと思われる。近年の英国で代表的なものとしては、リードの近代美術論を基礎にその業績を総括したデーヴィッド・シスルウッド<sup>9)</sup>や、リードの芸術教育論の難点を列挙したマルコム・ロスの論文<sup>10)</sup>などを見ることができる。

このように、欧米における研究では、概してリードの非合理性に関わる批判的な評価が中心であり、我が国では、それらをふまえた上で、なお多くの教育者をひきつけるリードの思想に対して、独自の視点から再評価を加えようとする姿勢を認めることもできよう。長谷川氏が指摘するように、我が国における美術教育の根底に、リードの思想に共通する非合理性と一種の生命哲学重視の潮流があるとすれば、我が国においてこそ、欧米からは見えない展開の可能性が、まだ残されているとみることもできるであろう。また、歴史的な事実関係の検証に基づく探究が十分ではないという傾向も明らかになった。1920年代から本格的な美術批評の活動に入ったリードが、その後、美術教育の分野に関与していくようになった動機については、自伝や伝記等によって、例えば、リードが傾倒していたユング心理学に対応するマンダラ図形を子どもの絵に見いだしたという出来事や、教師であったリードの最初の妻の影響などが見いだされてきている<sup>11)</sup>。しかし、リードによる現実の美術教育活動への接近を事実に基づいて論証した研究は、竹井氏も指摘しているように、これまで十分になされてきたとは言えない。筆者はこれまで、20世紀前半を中心とする英国美術教育史をリチャードソンという教育実践者の立場から明らかにしていく研究を進めてきたが、その過程で、リードとの直接の対話を含む資料に何点か遭遇することになった。これらについては、リチャードソンについて述べる中で部分的に触れたこともあるが<sup>12)</sup>、本論文では、前述の目的に沿って新たに検討し直していく。もちろん、リチャードソンという個人との接触のみで、リードと美術教育運動との接近の過程がすべて明らかになるわけではないが、リー

ドの著作からその思想を解説する研究が中心を占める中で、希少な事例からの研究は、一つの独自の視点を提供するものと思われる。

## 2. 英国美術教育改革史とリードの位置

20世紀前半の英国社会は、二度の世界大戦と度重なる不況、政治的葛藤を経験しながらも、全体としてみれば、中流階級や労働者階級の生活水準向上、メディアの発達などを背景とした大衆社会の形成が進行し、教育や文化においても、より広い国民層の参加が可能になっていく時代であった。また、学習者中心の教育への社会からの期待は、例えば、第一次大戦下であった1917年に、当時の教育大臣が、とくにリチャードソンによる指導の成果に触れて、子どもの知識よりも知恵と想像力を信頼することを呼びかけた講演<sup>19)</sup>にも、端的に表れているということができるであろう。戦乱と経済的疲弊の中での個人の尊厳への指向は、この時期の英国における文化と教育を通底する一つの思潮であったように思われる。

こうした中で、英国において展開した、子どもを一人の創造的な存在と見る学習者中心の美術教育への改革運動は、大きく3つの時期に分けてとらえることができる。第一は19世紀末から20世紀初頭、段階的な手本の模写に特徴づけられた従来の描画教育に対して一部の教育者が疑問を投げ掛けていく、前改革期ともいべき時代である。エビニーザー・クックが発表した1884年の会議報告<sup>20)</sup>は、19世紀半ばに英国の学校に導入された統一的な描画教育の基準に対して公然と批判したもっとも初期のものとしてされているが、リードも『芸術による教育』の中で子どもの描画発達研究の萌芽としてクックを紹介するとともに、補遺としてこの報告の抜粋を収録している。年代から見て、リードとこの時期の運動との直接的な接触はなかったものと考えられるが、子どもの本性に基づいた教育が必要という観点から、正確な描写訓練よりも想像力を重視した教育への転換を主張した点について、時代をさかのぼって共感を示したものと思われる。

第二は1910年代から20年代を中心に、フライやリチャードソンらによって、従来の制度や方法との実質的な「闘争」がなされた時代である。フライは1910年からセザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン、マティスらを独自に「ポスト印象派」と名付けた展覧会の企画によって、英国絵画の特徴であった物語性、倫理的教訓、細部描写の重視などに対し強く疑問を投げかけたが、一方で、英国美術衰退の背景として学校における美術教育制度にも容赦ない批判を加えていた。1917年に彼が企画した子ども絵画展は、学校における美術指導の弊害を示し、その廃止を主張するものであったが、この際にリチャードソンに出会い、その指導した子どもたちの作品と教育方法について知ったフライは、美術教育の廃止ではなく改革運動の支援へと方針を転換していくのである。この時期、リードは、第一次大戦で軍務を経験した後、1922年からのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館勤務、詩作や文学研究の一方で、『バーリントン・マガジン』や『リスナー』誌等で美術論を発表していた。

第三は、1930年代、リチャードソンがロンドン市視学官として、現職教員らとともに新しい美術教育の運動を広く展開し、急速に一般に拡大していく時期である。1937年の教育省による教師

用『提言』<sup>19)</sup>にも表現としての美術教育の目的が明確に示されたことで、「革命」は一つの段階を終え、「子どもの美術」はある意味で社会的認知を獲得したと見ることもできる。リードはこの時期、1931年にエジンバラ大学の美術史・美術論の教授職に就いているが、1933年にはロンドンに移って当時の前衛芸術家たちと交流し、革新的な美術批評を打ち立てていく一方、1934年頃から、フライ、リチャードソンらを通して子どもの美術教育への接近をはかっていく。このように、美術教育内部での目的と方法の変革がほぼ達成された時期に、いわば「遅れて」参加してきたことは、リードの芸術教育論の背景の一つとして留意すべきであろう。例えば、リードが、すでにある段階に達していた美術教育内部における改革よりも、主として学校カリキュラム全体における芸術の役割を論じた点との関連を考えることもできる。リードは、リチャードソンが死去した1946年から20年以上の長きにわたって英国美術教育学会の会長として影響を持ち続けるが、内部改革をすでに終えた美術教育の側からすれば、リードのような社会的知名度の高い評論家によって、学校教育における芸術の役割を社会に向かって発信することは、有益な関係であったといえるであろう。

### 3. 美術教育運動への接近

次に、リードとリチャードソンの具体的な関わりを通して、問題を考えていきたい。美術雑誌『パーリントン・マガジン』の編集に携わっていたフライは、エジンバラ大学を辞したリードが同誌の編集の職に就けるように支援したとされている<sup>20)</sup>。翌年の1月には、リードからフライにあてた、同誌の編集に関する書簡の中で、リチャードソンの子ども絵画展のために画廊を紹介したいという申し出が述べられており、さらに、フライがこの書簡をリチャードソンに転送して関心を促した<sup>21)</sup>。これが当時の小学校・中等学校における実際の美術教育改革の運動にリードがフライとリチャードソンを通して関与し始める、最も初期の記録を示すものの一つと考えてよいであろう。しかし、同時にこの年は、リチャードソンを中心とする美術教育改革の連携に、大きな変化が生じた年でもあった。同年9月、リチャードソンのカナダへの講演旅行の間に、フライは事故がもとで死去する。この時期にリードは、その美術理論における見解の相違からフライを批判する論考を相次いで出版するが<sup>22)</sup>、一方でリチャードソンへの支持を通して美術教育への関与を進めていく。残された書簡に見る限りでは、少なくとも1935年2月にはリードからリチャードソンへ、彼女の推進する教育が「私たちの問題の唯一の解決方法」であり、積極的に協力したいという申し出が記され<sup>23)</sup>、同年5月の書簡には、リチャードソンの著書の書評を執筆したいという意向が綴られている<sup>24)</sup>。

リードによるリチャードソンの教育に関する言及は、主な出版物では次のような例を挙げることができる。第一に、1934年に出版された『美術と産業』であり、美術教育について述べた章において、モホイ=ナジによる触覚練習の例とともに、リチャードソンによるパターン制作の方法が紹介されている<sup>25)</sup>。第二に、1935年にリチャードソンが出版した『ライティング・アンド・ライティング・パターンズ』を紹介する『リスナー』誌の記事である<sup>26)</sup>。この書評の内容とその前後の両者の接触をめぐっては、一連の往復書簡が存在する。第三に、1943年の『芸術による教育』

である。この中で、少なくとも3箇所の言及が、リチャードソンに関係が深い。まず、第5章において子どもの描画の分類を進める上で、「直観型」の機能に関連してライティング・パターンの方法に触れた箇所であり、次に第7章において、教師と子どもの人間関係の重要性を述べた箇所でリチャードソンの言葉を引用している。さらに、第6章において中心的に扱ったマインド・ピクチャーは、リチャードソンが1910年代から開発してきた教育方法であるが、なぜかりチャードソンの名前には一言の言及もない。第四に、リチャードソン死去の翌年（1947年）、リードが会長を務める美術教育学会の論文誌『アテネ』は特集を組み、生前の彼女を知る様々な人々の証言を集めた<sup>23)</sup>。

このような一連の経過を見てみると、「教師と子どもの人間関係」のような一般的な内容でなく、美術教育の方法や理論に関わってリチャードソンに言及した箇所は、ほとんどが、ライティング・パターンに関わるものであり、しかもその具体的な交流は、1934年から35年に限定されていることがわかる。その後、1938年のロンドン市子ども絵画展において、リチャードソンによる美術教育改革の動きは頂点を迎えるが、翌年の第二次大戦参戦とともに彼女は病気を抱えながら子どもたちの疎開業務に奔走、1942年には療養に専念するため退職を余儀なくされている。したがってリードが『芸術による教育』の執筆に至る時期には、リチャードソンとの直接的な交流は乏しかったと考えるべきであろう。このような観点から、1934年から35年における、ライティング・パターンに関わる両者の交流を、リードからの美術教育への初期の接近を示す数少ない具体的な事例として位置づけ、考察の対象とする意義が認められる。

## 4. ライティング・パターンをめぐる交流

### (1) ライティング・パターンの開発と成果

それでは、リチャードソンの教育の中で、ライティング・パターンは、どのような役割を果たしていたのであろうか。子ども自身の想像力を重視した美術表現と主体的な美術鑑賞者の育成を目指す上で、リチャードソンはいくつかの特徴的な教育方法を開発してきた。最もよく知られているものに、教師自身が思い浮かべた絵の情景を語って聞かせ、子どもたちの想像力を喚起するワード・ピクチャーの方法がある。また、模倣を離れて自分のイメージを用いる習慣を獲得するための、目を閉じて自然にイメージを浮かべる訓練から多彩なマインド・ピクチャーが発展し、関連して単位形の組み合わせによる初歩的なパターン制作の学習も行われていた。それぞれの表現目標に沿った技法を見つけだしていくための材料実験やゲーム、支援が行われるとともに、美術批評を読んで意見を述べ、美術についての考えを文に書き、様々な文化について学んだことを自らの美術表現に応用する学習など、今日でも注目できる内容が含まれていた。リチャードソンは、地方の中等学校の美術主任として上記のような方法を積極的に用いたカリキュラムを開発すると同時に、低学年の文字の書き方も担当していた。そこで彼女は、子どもたちのリズムカルな手の動きに基づく筆記体の練習方法を考案し、すでに1928年には「ダドリー・ライティング・カード」<sup>24)</sup>という教材として出版していたが、当時は、活字体に対して、美しい文字を素早く書くことで

きる筆記体が再評価され始めた時期であり、リチャードソンは美術とは別に、文字の書き方の教育についても新しい指導法の開発者として成功を収めていた。そして、特に1930年のロンドン市視学官就任以降、教師たちと協力して、この手書き文字の練習を美術における平面デザインと関連づける学習法へと発展させたのが、ライティング・パターンであった<sup>25)</sup>。

ライティング・パターンの成果は、リチャードソンのロンドン市視学官就任の二年後には、すでにフライによって間接的に公にされている。英国商務省が産業デザイン振興のために設けた審議会報告の中で、フライはロンドン市の子どもたちがデザインの創作に優れた成果を見せ、すでに織物として市場に貢献していると紹介し、これを指導しているリチャードソンを中心に、教育と産業の連携を推進するという構想を提案しているのである<sup>26)</sup>。このことは、1933年にリチャードソンがロンドン市の教師たちと協力して開催した子ども絵画展に関して、フライが発表した記事とも対応する。フライはそれまでリチャードソンの教育成果について、主に子どもの絵画芸術の価値について論じてきたのに対し、この記事では特にライティング・パターンの意義について集中的に論じ、下町の低所得層の子どもたちがこの方法によって色彩の調和した美しいデザインを描いているのを何百も見たと述べて、織物産業の振興に対して貢献する可能性を強く示唆しているのである<sup>27)</sup>。これらの成果をまとめた1935年の『ライティング・アンド・ライティング・パターンズ』は、6歳からの年齢段階に応じた文字の書き方（ライティング）の練習と、アルファベットの組み合わせによるパターン制作（ライティング・パターン）の練習を並行して指導する教科書に、教師用解説書を合わせた出版物であり、その後多数の版を重ねてこの国の筆記教育とデザイン教育に影響を与えた。

## (2) リードによる書評

同年にリードが発表した「ライティングからパターンへ、子どもたちへの新しい美術指導の方法」<sup>28)</sup>は、このリチャードソンの著書を紹介した記事であるが、単なる書評ではなく、リード自身の芸術教育観を強く反映したものとなっている。それはまず、そのタイトルにも読みとることができる。リチャードソンの著書では、そのタイトルが示すように、ライティング（書き方）とパターンが同列のものとして扱われているが、リードの記事では、ライティングを出発点として、パターン制作へ、そしてその全体を「美術指導の方法」と位置づけるという、一種の段階あるいは階層構造が見られるのである。記事の内容を見ると、その前半では、主にリチャードソンの著書の構成や引用に基づきながら、文字とパターンが相互に発達する練習の仕組みが紹介されるが、後半では「パターン制作から、絵画制作へと移るとき」に、そのさらなる効果が試されるとし、「パターン制作において自由に伸ばすことのできた、色彩を調和させる感覚が絵画制作に効果を及ぼしている」「リズム感覚もまた、[中略]パターン制作において十分に練習されたものが、もう一方の活動に効果を及ぼしている」、さらに、ここで発達させられた「リズムと色彩」が「すべての芸術活動の基礎になる」と主張するのである。さらにこの効果は、美術学習にとどまらず、人間の生活全体に影響を及ぼす、芸術による一種の総合的な革命とも言うべきリードの壮大な構想の中に位置づけられていたことは、記事の冒頭で「私たちの日常生活と環境に計り知れない影

響をもたらす革命が、この困難な教科の指導において、ゆっくりと起こっているのである」「その心理学的重要性を考慮し、ある種の歴史的比較をすることによって初めて、その変化の根本的な性質が明らかになる」等と述べ、その発展に大きく貢献しているリチャードソンの新しい著書が、「この問題を考えるのに適切な機会をもたらしてくれる」として、書籍の紹介に入っていることから明白であろう。リードは、文字の書き方とパターン制作の教科書を紹介しながら、実は、『芸術による教育』に至る、芸術を基礎とした教育による人間世界の根本的な変革を主張していたのである。

### (3) リチャードソンの反論

理論家によるこのような壮大な意義づけに対して、その本来の実践者であるリチャードソンは、どのように考えていたのであろうか。この書評の執筆前後に両者の間で交わされた往復書簡は、この問題を考える数少ない貴重な資料である。特に、1935年6月5日付でリードが送った同書評の草稿<sup>29)</sup>に対して、同13日にリチャードソンが送った返答には、有名な批評家からの賞賛に満足するような姿勢は全く見られず、むしろ反論に等しい意見が綴られている点が注目される<sup>30)</sup>。リチャードソンはまず冒頭で、『『ライティング・アンド・ライティング・パターンズ』は、本来、手書き文字の指導法であり、動きやコントロール、その他の半ば技術的な問題の重要性を強調したものです。』とし、絵の指導法に関する著作は、これとは別に計画中であることを強調している。彼女の教育方法の全体を知るならば、内的イメージを重視した絵画表現の指導法は、ライティング・パターンの開発以前に独自に確立されてきたものであることは明白であり、パターン練習が絵画における成功の基礎であるとも受け取れるリードの主張は、リチャードソンにとっては受け入れがたかったに相違ない。先にも概観したように、リードからのリチャードソンへの言及は、彼女がそれまでに確立してきた絵の指導法に関する成果について驚くほど無関心である。これが、美術教育改革の歴史に「遅れてきた」ための無知によるものか、あるいはその確立に関わったフライの成果を認めようとしなかったためか、もしくは純粹に自分の理論に適う対象しか興味がなかったためなのか、おそらくそのいずれもがある程度正しいのであろう。

リチャードソンは同書簡でまた、「これは、教科全体のほんの一部分にすぎないので、私の考えでは、子どもの心に思い描く力という問題の重要性を研究しなければ、人々をあまり遠いところまで連れて行くことはできないと思います。」と述べている。これはすなわち、イメージの作用をより根本的なものにとらえるリチャードソンの見解を示すものであると同時に、ライティング・パターンを基礎として人々の生活全体までを変革しうることを示唆するようなリードの主張に対して、明確に否定の意を表しているのである。このことから、リチャードソンが文字通り人生をかけて美術教育の変革に熱意を傾けた人物であると同時に、その教育法の成果に対しては、あくまでも事実に基づいて冷静に評価していくという現実的な責任感をもって対処していたということが認められる。リチャードソンは、リードに対してさらに二つの提案を述べている。一つは、パターン制作と絵画制作という二つの活動が、学校教育を通じて並行して行われているものであると伝えてほしいこと、二つ目には、前回リードが子どもの展覧会に訪れたときに年齢の高

い子どもたちの作品を見なかったことを指摘し、13歳頃で創造的活動が停止するという通説に再考を促すためにも、15、6歳の子どもの作品写真を図版に加えてほしいということであった。追伸には、『リスナー』誌の編集者と思われる人物を、翌日に写真の件で尋ねる予定であることが添えられている。

これに対するリードからの返信<sup>31)</sup>によると、リチャードソンは編集者を訪ねた後、写真の件で解決がつかなかったのか、さらにリードに直接面会に向かったが、時間が合わず実現しなかったようである。リードはこの書簡で、絵を描く活動が後の段階の活動であるような印象を与えた部分を校正で直したことを伝え、また、一部を削って、字数を合わせるために新たに加えたという文章を添付している。しかし、最終的に出版された記事では、リチャードソンが草稿に線を引いて強く問題視した、「パターン制作から絵画制作へ移る」という箇所は訂正されずそのまま掲載されており、絵画が初期からパターンと並行して教えられているという事実の記載もない。また、掲載写真も7、8歳の子どものものだけであり、より年齢が高い子どもたちの作品にも注目してほしいというリチャードソンの要望は実現しなかった。削除されたのは、芸術家になるために必要な特質は学校教育を終えたあとの成熟を待つ必要があり、リチャードソンの方法及び範囲ではない、とした部分である。これは唐突に専門教育の話題が入っていたわけであり、リードが書簡で「誤解を招きやすい文」としたのは当然であろう。代わりに、文末に二つの節が加えられているが、その一つは、イメージ—感情—芸術と、観察—概念—科学とを教育制度において明確に区別する必要があると述べた箇所であり、前者を新しい教育法の立場としたものと思われる。加筆されたもう一つは、記事の最後に、「意味のある形を見つけ出す行為」と「視覚的イメージを見つけ出す行為」の間には心理学的相違がない、という主張を、積み木遊びを例に述べた箇所である。これは、抽象的な形を扱うパターンと、具体的な形を扱う絵画との同質性を示唆することによって、パターンと絵画が並行する活動であるとしたリチャードソンの主張に配慮したものであろうか。最後の「子どもにとっては、イメージは実在なのである。物体はシンボルなのである。芸術とは、シンボルにイメージの実在をまわさせることなのである。」という巧みな修辭には、これ以上の議論を停止させてしまうような作用があることは認めざるを得ない。

なお、リードが『芸術による教育』に引用したクックの言説の中に、これとよく似た比喩が用いられているので関連して指摘しておきたい。「デザインは、描画に先立つものである。子どもは線を引けるようになる前に、棒や輪のような既製品を用いることができる。[中略]子どもは、単純な要素を用いてデザインを構成し、楽しんでいる。この、本来備わっている発見する力に対する意識を喚起すること、自ら学ぶ、すなわち自然からの教えを受け取ることができるという教訓を確かなものにする、それは、子どもに生涯にわたって物事を扱う強い力と自己活動への激励を与えることである。」<sup>32)</sup>これは、クックの論文の抜粋の中で、観察による機械的な描写と想像力に基づく絵画との区別を明確にする文脈に続いて提示されている箇所であり、またこの箇所の直後には、リチャードソンの方法と類似した、アブレットによるデザインの指導方法に関する善及があるというのは、全くの偶然であろうか。しかも、この引用箇所でクックは、「デザインは、描画に先立つもの」と述べ、その効力は「生涯にわたって」生きていくための力となる、と

主張するのである。また、リードは同書でリチャードソンのパターン制作の指導を、彼がより根本的な型と考える傾向のあった「直観型」と結びつけて説明している。これらのことは、リードが1935年の書評の後も、パターンの学習が絵画に先行すべきであり、しかもこの学習が芸術学習の基礎にとどまらず、人生の基礎ともなる、という観念を放棄したわけではなかったことを示唆していないだろうか。リードの署名が入った記事であるから、彼の見解を自由に述べること自体はだれも非難することはできない。ただここで、あえて実践者の側に立った判断を述べるならば、彼女が事実に基づいた記述を要求したのに対し、リードの側では、自説の修正を含めた、より誠実な対応をとることも可能だったのではないかと思われてならないのである<sup>33)</sup>。リチャードソンが死の直前に綴った回想録に、「ライティング・パターンが絵を描く前にくるべきだという印象を与えたのではないことを、明確にしておきたい。」<sup>34)</sup>と改めて述べたことは、この問題に対する懸念が、その後も続いていたことを示すものであろう。

## 5. 批評家と教育実践者との対話

現実の教育活動に携わる実践者の認識と、リードの芸術教育論との間に生じた、このような微妙でありながら特に教育実践者にとっては重要ととらえられた懸隔は、何に起因するのであろうか。ここでは、限られた資料をもとに、教育実践に対するリードの「対話」のあり方と、その認識構造の特質について指摘してみたい。その際に比較できるのが、フライによる美術教育改革への関与である。先にも触れたように、フライとリードは、ともに美術教育運動に積極的に関与した美術批評家であり、リチャードソンを結節点として、1934年頃を境に、あたかも世代交代するように歴史の舞台を往来している。あまりに単純化することは避けなければならないが、両者の対比はその特質を鮮明にする上で役立つであろう。

フライによる一連の芸術教育論の内容を検討してみると、そこには相互影響性ともいえるべき、ひとつの一貫した性質が認められる。すなわち、対話によって理論家と実践者の双方が新しい視点を見だし、それぞれの仕事の確立に反映させているということである。例えば、1917年の論文では、リチャードソンとの対話によってフライが美術教育廃止論から改革支援へと運動方針を大きく転換した経緯が述べられるとともに、教室で行われる美術批評の学習が、フライが一つの理想としていた、中世の工房における共同体の相互教育作用に通じるものがあると主張するのである<sup>35)</sup>。また、1919年の論文でフライが述べている、マインド・ピクチャーと思われる方法は、リチャードソンがその学習指導計画や講演原稿に記している具体的な教育方法の記述とよく一致している<sup>36)</sup>。1924年の論文では、リチャードソンによる美術批評の授業の様子を目に浮かぶように再現して伝えるとともに、具体的な生徒作品をとりあげ、あたかも美術作品を扱うように詳細に解釈してみせている<sup>37)</sup>。

一方、リードの理論における教育実践との相互影響性について検証してみると、これまで明らかにできた範囲から考える限りでは、どちらかという、自らの理論的枠組みに適合するように実践の成果を扱う傾向があったことは否定しがたい。これは、ライティング・パターンをめぐる

対応のみでなく、例えば後年の『芸術による教育』において、あらかじめ意図した心理学的類型に子どもの絵画を分類していく論証の過程や、マインド・ピクチャーについて、それを指導した教師の証言（マンダラやユング心理学との関連を強く否定した<sup>38)</sup>）を全く考慮せずに独自の解釈を進めていく手法においても、一貫しているといつて差し支えないのではないだろうか。

リードのこうした傾向は、彼自身の人格に起因する面とともに、芸術に関する認識の構造にも由来する面があると考えられることを指摘しておきたい。ライティング・パターンの書評に即して説明すると、身体感覚と無意識的な美的選択に関わるパターン制作という活動と、観察や知識、文化的・社会的意味や熟練などに関わりの深い絵画制作という活動との関連が述べられているが、「パターン」をより基底部にある層として、「絵画」をより上層部にあるものとして位置づけ、なおかつ基底部に位置するパターンの能力を獲得することによって、上層部に位置づけられる絵画における成功がもたらされる、という因果関係を期待する傾向が見られるのである。これは、別の言葉で述べるならば、異なる学習能力間の転移に類似した作用が容易に発生するということを期待に基づいて主張している、ということもできるかもしれない。これに対してリチャードソンの実際の指導では、パターンの成果が自然に絵画に反映されるというような、一方向的な因果関係を想定していない。むしろ二つの学習を独立並行して行い、それらの間を結ぶ学習成果を積極的に作り出していくことに教育の役割を見いだしているのである。

さらに言えば、『芸術による教育』を一つの到達点とするリードの芸術教育論においては、宇宙の構造から子どもの心理、そして分子構造まで、非常に異なった次元と領域に属する様々な存在を、美の原理によって統一的に説明することを試みている点だが、この問題を通常の方法では検証不可能な規模にまで拡大していると見ることができる。すなわち、異なった次元の芸術（的作用）の概念が多層構造のように重なったものとして認識されているが、異なる層の間の相互関連を、自明あるいは自動的なものとしてとらえる傾向があり、それがしばしば現実の指導過程と十分に合致しない要因の一つとなっていると考えられるのである。芸術の作用を（そしてこのとき芸術の作用と教育の作用は一致しているのであるが）このように人間世界の全体にまで拡張して考える傾向は、リードが大学教育における芸術の役割を論じた1931年の講演の結びに、「ついには、私たちがこう言えるほど、芸術が私たちの生活を満たすべきなのです。芸術作品は存在しません、芸術だけがあります、と。なぜなら、その時、芸術は、人の生き方そのものだからです。」<sup>39)</sup>と述べた部分にもすでに表れている。

リチャードソンの場合、初期の思想には、「善のように、良い美術は人々から自然に現れてきます。」<sup>40)</sup>というように、想像的な美術表現と人間の倫理的行為の自然な発現を同一視しているような傾向も見られるが、その後の主張を見ると、厳しい現実認識の上に検証される事実に基づいて述べるという方針を鮮明にしている<sup>41)</sup>。リードが書評において示した理想的な「効用」に対して、むしろ抑制的な態度を示したことも、その表れであると考えられる。リチャードソンによる指導の成果が、その自由な雰囲気とは対照的に、細かな準備や教室環境の整備、授業規律の維持などの勤勉な努力によって支えられていたという同僚からの証言は、理想を実現していく実践者としての姿勢を示したものとして評価できるのであろう<sup>42)</sup>。

## 6. まとめと課題

本稿では、主にフライやリチャードソンとの関係を示す資料の解釈から、英国美術教育改革史におけるリードの芸術教育論の位置づけについて新たな解釈を提示した。リードが「美術教育革命」の終わりに登場し、その最初の接近の段階においては、とくに基礎的なデザインの学習による感覚の陶冶を根底にした学校カリキュラム全体、さらには人間生活全体に影響を及ぼす一種の美的変革を志向したこと、また、その壮大な理想を語る上で、時には現実の学習過程を軽視した理論付けを行う傾向があったこと、などを具体的な資料にもとづいて示すことができた。

現代の私たちにとっては、こうした事実関係の詳細な検討の結果、リードとフライ、リチャードソンらに代表される理論家と実践者の双方の立場を理解できることは、利点であるといえる。本稿では、リードに対して、教育実践過程の軽視という側面からやや批判的な論証を行ったが、彼が唱えたような、芸術によって幼少期から美的感受性を養うことが人生の基礎となり、個人と社会の根本的な変革をもたらすという理想は、非常に魅力的な考えであり、今日でも芸術教育に関して同様の期待が語られることは珍しいことではない。その際に、私たちはリードの主張と同様の限界を抱えることになるという自覚をもつことが必要である。一般に、「芸術」という概念は、文脈に応じて異なった範囲と作用を指して用いられることが多く、それがこの文化領域のもつ複雑さ、困難さ、脆弱さ、そして多様な可能性を示すとともに、芸術教育の議論においても、しばしば矛盾を引き起こす要因の一つとなっている。実はこのとき、私たちは、リードのように芸術（的作用）の異なる次元を意識しないうちに移動し、異なる層の間に自動的に転移作用が生じることを、期待にもとづいて語っていることが多いのである。

こうしたことから導き出される一つの可能性として、最後に、教育を含む芸術的作用の多様な側面を、芸術による絶えざる世界革新という全体的構造の中に位置づけられる多層構造として認識することに触れておきたい。これは必ずしも上下の階層や段階を意味するものではなく、むしろ、リードの思想に見られたような階層構造への傾向性を、教育実践の視点から客観的な態度で問い直していくものである。すなわち、芸術的作用を意味する各層間の関係について事実にもとづいて検証するとともに、リチャードソンが絵画とパターンの学習において示したように、各層間の関係を組み直し、積極的に相互作用を生じさせる教育方法を作り出していくことも、私たち教育者の一つの役割であると考えてるのである。いわば、多層分離した芸術が教育によって統合され、本来の全体性を実現する、と表現することもできるであろう。これを漸進的に確かなものにしていくためには、理論と実践との開かれた相互啓発が不可欠となることを、本研究の成果は示唆している。歴史におけるその一つのモデルが、英国の美術教育に大きな転換をもたらした、フライとリチャードソンの対話であり、またおそらくは未完に終わったリチャードソンとリードの対話なのである。未完に終わった実践者と理論家との対話を未来において続けていくことは、美術科教育学という一種の実用科学において、歴史的アプローチに基づいた研究のもつ、一つの意義であると考えてるのである。

## 註

- 1) Herbert Read, *Education Through Art*, Faber and Faber, 3rd ed. 1961 (First published 1943. 宮脇・岩崎・直江訳『芸術による教育』フィルムアート社, 2001年).
- 2) 山本朝彦「H・リード芸術教育論の現代的意義」『大学美術教科教育研究会報告』第3号, 1981年, p.65～73. なお, 同氏による研究冊子『芸術による教育とハーバート・リード研究の現在』(リード『芸術による教育』2001年版に付録)には, 最近までの国内外の研究者による到達点が概説されている。
- 3) 長谷川哲哉「『ハーバート・リードの芸術教育論』への諸批判について」『美術教育学』第6号, 1984年, p.45～56. 長谷川哲哉「『ハーバート・リードの芸術教育論』の魅力の根源について」『美術教育学』第7号, 1985年, p.5～16.
- 4) 長谷川哲哉「H. リードの『芸術による教育』』再考—G. オットーの美術教育史論から—」『美術教育学』第10号, 1989年, p.89～108.
- 5) 竹井史「H. リードとNEFを中心とした新教育運動に関する一考察」『美術教育学』第9号, 1987年, p.53～66. 引用はp.53.
- 6) 竹井史「H. リード芸術教育論の展開過程に関する一試論—H. リード研究における共通基盤確立のために—」『美術教育学』第10号, 1989年, p.109～126.
- 7) 南部正人「H. リードにおける直観の諸問題」『美術教育学』第9号, 1987年, p.45～52.
- 8) 本村健太「リードのみたバウハウス—ハーバート・リードによるバウハウス教育の受容について—」『美術教育学』第16号, 1995年, p.331～340.
- 9) David Thistlewood, "Herbert Read: a Critical Appreciation at the Centenary of his Birth," *Journal of Art and Design Education*, volume 12.2, 1993, pp. 143-160.
- 10) Malcolm Ross, "Living there: Herbert Read's Education through Art Fifty Years On," *Journal of Art and Design Education*, volume 12.2, 1993, pp. 135-141.
- 11) 例えば, James King, *The Last Modern - A Life of Herbert Read*, Weidenfeld and Nicolson, 1990, pp.216-217.
- 12) 拙著『20世紀前半の英国における美術教育改革の研究』建帛社, 2002年, p.109～112.
- 13) "Mr. Fisher's Advice to Teachers," *Times Educational Supplement*, June 28, 1917, p. 246.
- 14) Ebenezer Cook, "Our Art Teaching and Child Nature, a review of the discussion - Art Section, International Conference, Health Exhibition, 1884," *Journal of Education*, Dec. 1, 1885(pp. 462-5) and Jan. 1, 1886 (pp. 12-15).
- 15) Board of Education, *Handbook of suggestions for the consideration of teachers and others concerned in the work of public elementary schools*, His Majesty's Stationary Office, 1937.
- 16) King, pp.117-118.
- 17) 英国中央イングランド大学マリオン・リチャードソン・アーカイブ所蔵のリード書簡による。Herbert Read, "Letter to Roger Fry," 8.1.1934, transferred to Richardson. (MRA1282, MRAはMarion Richardson Archive所蔵資料番号, 以下同じ。)
- 18) 例えば, 次の二著における批判。Herbert Read, *Art and Industry*, Faber and Faber, 1934. Herbert Read, "Roger Fry," 1934, reprinted in *A Coat of Many Colours*, Batler & Tanner, 1945, pp. 282-291.

- 19) Herbert Read, "Letter to Marion Richardson," 27th February, 1935. (MRA1281)
- 20) Herbert Read, "Letter to Marion Richardson," 21. v. 35. (MRA1825)
- 21) Read, *Art and Industry*, p. 127.
- 22) Herbert Read, "Writing into Pattern, A New Way of Teaching Art to Children," *Listener*, 19 June 1935.
- 23) *Athene*, Vol. 4, No.1, Society for Education in Art, 1947.
- 24) Marion Richardson, *Dudley Writing Cards*, London, G. Bell and Sons, 1928.
- 25) Marion Richardson, *Art and the Child*, University of London Press, 1948, pp.53-58.
- 26) Roger Fry, "Memorandum," *Art and Industry, Report of the Committee Appointed by the Board of Trade under the Chairmanship of Lord Gorell on the Production and Exhibition of Articles of Good Design and Every-day Use*, London, His Majesty's Stationery Office, 1932, pp. 44-49.
- 27) Roger Fry, "Children's Drawing at the County Hall," *The New Statesman and Nation*, June 24, 1933, p. 844.
- 28) Read, "Writing into Pattern."
- 29) Herbert Read, "Letter to Marion Richardson," 5. 6. 35. (MRA3371)  
Herbert Read, "A Method of Teaching Art," a draft for the book review for the *Listener*, 1935. (MRA3372)
- 30) Marion Richardson, "Letter to Herbert Read," June 13th, 1935. (MRA3373)
- 31) Herbert Read, "Letter to Marion Richardson," 13. 6. 35. (MRA3374)
- 32) リード『芸術による教育』, p.196.
- 33) ただし、キングによる伝記にも見られるように(King, p.150), 当時のリードは様々な文化人との論争の渦中にあり、また自身の離婚調停もあって、必ずしも十分な配慮をすることができない状況にあった可能性も考慮されるべきかもしれない。
- 34) Richardson, *Art and the Child*, p. 58.
- 35) Roger Fry, "Children's Drawings," *Burlington Magazine*, June 1917, pp. 225-231.
- 36) Roger Fry, "Teaching Art," *The Athenaeum*, September 12, 1919, pp. 887-888.
- 37) Roger Fry, "Children's Drawings," *Burlington Magazine*, January 1924, pp. 35-41.
- 38) リード『芸術による教育』, p.215.
- 39) 前掲書に補遺として収録, p.300.
- 40) Marion Richardson, "August. 31. 1918," p. 5. (MRA3394A)
- 41) Marion Richardson, "L.C.C. No.1 1925," p. 1. (MRA3442A)
- 42) M. D. Plant, "Various Aspects of Marion Richardson's Work," *Athene*, Vol. 4, No. 1, Society for Education in Art, 1947, p. 19.

本論文執筆に際し、英国中央イングランド大学よりマリオン・リチャードソン・アーカイブ所蔵資料閲覧の許可と協力を得たので、ここに感謝の意を表したい。

## **Herbert Read and the Reform in Art Education in the United Kingdom**

—A Consideration on the Dialogues between Critics and an Educator—

**NAOE Toshio**

This article throws some new light on the initial approach by Herbert Read, the author of "Education through Art (1943)", to the movement of reform in art education in the United Kingdom in the 1930's, through investigation of the materials that show his relationship with an art critic, Roger Fry and an educator, Marion Richardson. It mainly discusses the historical positioning of Read's theory on art education, his tendency to favor a type of aesthetic revolution that affects the whole school curriculum and also human life by the training of sensation through art, and the relationships between theory and practice in teaching.